

28.1.14 (木) 朝刊

(第三種郵便物認可)

佐賀市

西九州大学でカウンセリングを学ぶ学生グループが、高齢者から戦争体験を聞き取り、記録・保存する作業を行っている。カウンセリングの基本となる傾聴技術を養うとともに、戦後70年が過ぎて風化が進む記憶を後世に語り継ぐのが狙い。3月までに証言録を文集としてまとめる。

戦争の記憶聞き取り

西九州大生グループ 高齢者18人から



スライドなどを使いながら聞き取った戦争体験を中間報告する学生グループ。佐賀市の西九州大学神園キャンパス

空襲の恐怖、学徒動員 証言録に

聞き取りをしているのは昨年度新設された子ども学部心理カウンセリング学科の2年生46人。同大学のエルダーカレッジを受講している70～90代の18人をグループで訪ねて話を聞いた。12日に佐賀市の神園キャンパスであった中間報告会では、空襲の恐怖や学徒動員により兵器工場で働く日々など、9人の証言をグループごとに発表した。愛知県岡崎市の工場に学徒動員された女性は、うその診断書を用意しても止めようとした母を振り切って家を出た経緯を、「わが子を死なせたくない母の思いと、非国民と言われるのではなにかという思いで揺れ動いた」と振り返った。

終戦当時7歳だった女性は、佐賀市久保田町の自宅で昼間に南西の空から立ち上る夕立雲を見て急いで洗

濯物を取り込んだが、夕方のラジオ放送でその雲は長崎原爆によるものだったことを知るといって、日常に溶け込んでいた戦争の記憶を掘り下げていった。

聞き取りをした副島理央さん(24)は「陰鬱としたイメージしかなかった戦時中だが、子どもの視点では楽しみを見いだそうとする思いも感じ取られ、新鮮な気持ちで話が聞けた」と話した。(村上大祐)